

報 告

アメリカ留学報告記 番外編

NY再訪ーテロから5年

聖隷浜松病院 てんかん科

山本 貴道

■NYの憂鬱

19時20分成田発JAL 048便に乗り久しぶりにニューヨークへ向った。12時間30分のフライトのはずがJFK空港に着いたのは予定到着時刻の18時50分を大巾に遅れ、入国審査を経て到着ロビーに出られたのは22時頃であった。NYU (New York University) 大学院の時に同じクラスをとっていた日本人の友人が車で迎えに来てくれたが、とにかく平謝りで早速マンハッタンに向った。クイーンズからMidtown Tunnelに近づくとニューヨークらしいど派手な看板が迎えてくれる。23時頃というのにMadison Square Gardenのあたりは昼間とさして変わりのない人出だ。友人と軽食をとりながら、まずはお互いの近況を報告しあった。さすがに疲れもピークで、早々にホテルの部屋にチェックインした。

今回は大学院に入る前に勤務していたNYU Medical Centerを訪問したのだが、徒歩でも通い易いように34丁目のホテルを予約していた。ホテルを出てまっすぐ東に向かって歩くだけである。一泊200ドル程度でマンハッタンでは安い方だが、とにかくひどかった。宿泊客はほとんどがアメリカ国内の田舎から出てきた所謂お上りさん風のファミリーばかりで、マンハッタンに大枚を落としていきそうなゴージャスな外国人は一人も見当たらない。日本にいる間にインターネットで調べていたそのホテルの評価も最悪で、「ダニや南京虫が出るのでご注意を。」というものであった。日本からダニ退治用のスプレーなど豊富に買い揃えてバッグに詰め込んであった。早速ベッドの周囲にスプレーを撒き、シーツに身を包んで何とか眠りに就いた。翌朝ダニらしきものを数匹シーツの上に見つけたので、背筋が凍ったが幸い刺されては

いなかった。このレベルのホテルには気の利いたレストランは無い。朝は2階にある小さなホールの入り口に、ベーグル・ドーナツ・デニッシュが山積みされていて、コーヒーと共にセルフサービスになっている。係の女性が一人立って世話をしているので、その女性には1ドル程度はチップをあげなくては行けない。アメリカはチップの国なので1ドル紙幣はたくさん用意しておくとう便利である。

話を元に戻そう。わざわざこの日を狙って渡米した訳ではなく、むしろ避けたかったのだが、ニューヨークに到着した翌日が忘れようもない9月11日だった。WTCが倒壊したGround Zeroにてブッシュ大統領を始め多くのVIPが出席する同時多発テロから5周年の記念式典が行われた。テレビをつけるとニュースはその話ばかりで、何やら5年前の9.11当日(注1)のことに思いが巡り、またテロが起ころはしないかと不安はつのった。

ところでJFK空港での入国審査は予想していた以上に容易に済んだ。その代わり現在では入国者全員に顔写真撮影と指紋押捺が義務付けられている。また航空券を購入する際に、パスポート番号とアメリカ国内の滞在先をいっしょに申告しておけば、その情報が事前にアメリカの入国管理局に渡りようになっているらしく、より迅速に審査が終わる。航空券をインターネットで購入する場合には、この申告を自分でできるのでだいぶ便利になっている。

9月11日は朝からどのテレビ局もその記念式典の様子を生中継で伝えていた。同日ニューヨーク市民に行われたアンケート調査では、「今後5年以

内にテロが再発し自分あるいは自分の身内が危険にさらされるであろう。」という質問にYESと答えた人は57%に上った。5年を経ても尚多くの人々が危惧を抱きながら生活しているのが理解できる。

注1：同時多発テロ9.11の当日、筆者はNYU Medical Centerの病院に勤務し手術を行っていたが、その時の様子は本連載第3報に詳述した。

そんなテレビ中継を横目で見ながら準備を整え、9時過ぎニューヨーク大学内のてんかんセンター (NYU Comprehensive Epilepsy Center) に出向いた。今回の訪問の目的の一つは、NYUてんかんセンターでの手術症例のデータ整理・解析であったので、早速以前と同じ部屋で仕事を始めた。最初3日間近く、データや患者の外来チャートを調べるのに費やした。

9.11の直後にはNYU Medical Center内の三つの病院のいずれにおいても玄関でのsecurity checkは大変厳しいものになった。私が留学を終えて帰国する時まで同じ様な状態であったと記憶している。しかし今回の訪問ではsecurity checkは確実に甘くなっていた。当時病院玄関では、患者の見舞いでさえ免許証などのIDの提示を求められた。今回私はパスポートを見せようと提示したが、警備員達は仲間との会話に夢中で中身を見ようとしなかった。また通常、アメリカのどこの病院でも一時的な訪問の場合は、その期間限定のtemporary IDを作るのだが、以前の仕事仲間にそのことを話すと、どうしてそんなものが必要なのかと逆に質問されてしまい、まあいいかということになった。その組織に籍を置いていた人間には寛容なのであろうが、同時にこれで大丈夫なのかとこちらの方が心配してしまった。

■Reunion—再会

3日目には皆で夕食に行くことになった。てんかん外科を指導してくれた准教授御夫妻とてんかん外科部門直属で働くNurse Practitioner (NP) の女性と私の4人であった。皆良く知っている人達であり、気楽に食事を楽しんだ。ところでNPと

言うのは通常の看護師 (Registered Nurse ; RN) より更に上の資格であり大学院で学んでいる。脳神経外科の中でも小児神経外科・てんかん外科などそれぞれのdivisionに一人か二人ずついて、既に高度なトレーニングを受けそのチームに専属で働いている。白衣は医師と同じものを身に着けており、RNとは明確に区別されている。またRNのように勤務する病棟が変わるような人事異動は基本的でない。手術患者全てにわたって把握しており、術前には医師の説明で分りにくかった部分をより分り易い言葉で明解に説明してくれる。手術の前日には患者宅に電話を入れ、状態に変化がないか確認する。アメリカでは入院当日が手術日なので、朝5時半、患者とその家族がSame Day Admissionに到着すると、そこに医師より先に出向いて問診をとり、午前7時には患者を手術室に送り出す。手術が終ると医師と共に患者をICUに搬入し、術後の指示を出しRNに対してこと細かく指導する。医師に成り立てのレジデントでは、彼女/彼らの足元にも及ばない。術後問題がなければ数日で退院だが、その際の手続きをし、外来では再び医師と共に患者を診察しフォローアップしていく。難治性てんかんの患者に迷走神経刺激療法 (vagus nerve stimulation therapy) のためのNeuroCybernetic Prosthesisという装置が埋め込まれた場合、外来では医師と相談しながら刺激の条件を変えるのもNPの仕事となっていた。相当な責任を負わされているように見えるが、医師とは極めて綿密にコンタクトが取られており、NPの行為に単独は有り得ない。制度の違いとはいえ日本の医師から見れば羨ましい限りである。アメリカでは外科系の医師がそれだけ手術に専従せざるを得ないくらい忙しいために、このような職種が作られてきたのだと思われる。日本での学会・研究会などでアメリカから講演に来るナースはこのような人達なのである。

翌日は2例の手術 (1例目は側頭葉切除術、2例目は頭蓋内電極留置術) があるということで自分の技術を確認する意味で見に行くことにした。朝5時半頃起床し、6時過ぎに宿泊先のホテルを出た。34丁目のストリートは以前車でよく通った道だが



Ground Zeroは今も高いフェンスで囲まれている。向い側に地下鉄が入ってくるのが見える。ビルが建設される様子はなく、再開発が予想以上に遅れているのがわかる。

今回は徒歩だ。マンハッタンで最大のデパート Macy'sの前を通り過ぎると、摩天楼の一つEmpire State Building、Park Avenueでは左手にGrand Central Stationが見えてくる。ニューヨークの風景や病院内の様子・スタッフも含めて大きく変わることもなかったためか、懐かしいというよりも馴染みの場所にいる感じだった。後ろを振り向くとハドソン川の向う岸が遠くに見える。かつて住んでいたニュージャージーだ。生活の場所が今もそこにあり、家族もいるような気がした。手術室に着くと顔見知りの面々が迎えてくれた。“Hey, Taka! Are you back?”と聞かれ、“No, I am a visitor this time and gonna stay for a week.”と何度答えたかわからない。そしてアメリカらしいhugが続く。

最初は見学だけのつもりだったがナースが、“Taka, what’s your glove size?”と聞いてくる。既に手術室は私がscrub (手洗い) するものとして動いているらしかった。准教授と久しぶりの側頭葉切除術が始まった。既に聖隷浜松病院でもてんかん外科を行っているので、以前clinical fellowとしててんかん外科を学び始めた頃とは見えるもの

が違っていた。手術というのは経験を積みば積む程、視点が違ってきて、「木を見て森を見ず」的にならずに、より高所より大局から全体を見るように進化していく。「神の手」などというものが本当にあるのか私には分らないが、多くの偉大な外科医達の手が経験により磨かれていくのは紛れもない事実である。

■Ground Zero

金曜日が最終日だったが、その日の夕方、Ground Zero (同時多発テロ9.11の現場) がどれくらい変わったか見るため地下鉄に乗った。久しぶりに20ドルのMetro Card (額は自分で決められ、足りなくなれば販売機で必要分を足すことができる) を購入した。そこまでは良かったが、Ground Zeroを通り過ぎマンハッタンを出てブルックリンまで行ってしまい冷やりとした。すぐさまマンハッタン行きに乗り換えた。昼間は良いが夜間は気をつけなければいけない。以前住んでいた時もブルックリンやブロンクスの地下鉄駅構内で夜間に日本人が金品を盗られる事件があった。

ニューヨークは既に秋の長雨のシーズンで肌寒



以前Twin Towerのあった場所。クレーターになっている地下には広大なスペースができ地下鉄の駅につながっているが、今のところそれしかない。



立派な完成予想図はあるのだが……

かった。Twin Towerのあった場所は未だ大きなクレーターの状態で、外観は私が2003年の帰国前に見た時とほとんど変わっていなかった。

既に地下鉄は再開通していた。皆地下に向かって歩いていくので、最初は何があるのかと思い自

分もそちらに歩いていったが、観光客ではなくて通勤の人々だった。フェンスの前には計画している新たなWorld Trade Centerの予想完成図が掲げられているが、実際は財政的に極めて難しく広く市民からの募金で賄おうとしているのが実状のよ

うである。

機内2泊だったので、正味5日間のニューヨークへの旅はあっという間に終わってしまったが、昔の仲間との再会も果たし実り多い滞在であった。翌日の土曜日、朝早くから再び友人に頭を下げマンハッタンからJFKまで送ってもらった。チェックインに時間がかかると言われていたが、20分もかからず搭乗ゲートへ。日本へ持って帰るお土産を

全く買っていないことに気がつきDuty Freeに走った。アメリカ時間によく身体が切り替わろうとしているところだったが、友人とは再会を約束し機上の人となった。

次回はまた2003年まで話はさかのぼって、NYU Wagner Graduate School of Public Serviceでの厳しい大学院学生生活の一端をお送りします。